

平成二十九年 度 「未来を担う私たちの主張（青少年の主張大会）」

入 賞 作 品

〈最優秀賞〉

「平和」を願うこと

春日部市立武里中学校三年

南雲 巴

2

〈優秀賞〉

すばらしい伝統

春日部市立豊春小学校六年

相川 七海

5

プレッシャーとの戦い

春日部市立武里西小学校六年

加藤 心愛

8

女子野球に出会って

春日部市立宝珠花小学校六年

滝本 かのひ

10

私の夢、ドッグトレーナー

春日部市立富多小学校六年

渡邊 花音

13

コミュニケーションを取る楽しさ

春日部市立葛飾中学校三年

堀口 遥香

16

## 未来を担う私たちの主張作文〈最優秀賞〉

「平和」を願うこと

春日部市立武里中学校三年 南雲 巴

七十二年前はなあ…と唐突に思うことが最近よくあります。今年九十五歳になる曾祖母の影響でしようか。曾祖母は戦時中、宮内庁に勤め、天皇陛下などの食事の毒見をする仕事をしていました。今は認知症の症状で、時に私が娘になったりもしていますが、ふとした瞬間に語る七十二年前の出来事は私にも言えない感傷を与えてくれるのです。もはや他人事ではない、と。

様々なメディアが北朝鮮とアメリカの関係性の悪化について報道しています。どんなにテレビや新聞を見たって私達が知ることができるのはほんの一部なのでしょう。知ることができるのは結果論だけ。そこは今も昔も変わらないのだと思います。

曾祖父は太平洋戦争に行き、無事生きて戻ってこられた人です。曾祖母は、そのことについてよく話すといえます。曾祖父は、もう亡くなっていますが、遺影を見つめる曾祖母の顔はとても穏やかで、私はほほえましさを覚える一方、やるせない思いを抱きました。曾祖母だけではなく、戦時中国民はみんな、「家族」というものの大切さ・尊さを知っていたのだと思います。自分達にとっではかけがえのない家族を無残にも殺した戦争を憎むことも許されず、さらに苦しい思いを強いられたのではないのでしょうか。戦争が終わっても失われた命はもう戻ってきません。ただ、「終戦」

という結果がそこにあるだけなのです。国民は真実を知る権利もなかったのでしょうか。

今、問題の原点となつていている両国の人々は一体どれだけの事情を把握し、理解しているのか。七十二年前と同じことが今まさに起ころうとしているのではないか。実際に戦争が起こつて被害にあうのは何の事情も知らない両国民です。直接指図する人は何も被らず、「あんなことがあつたけれどあの時があつたから今がある」と美談に仕上げてしまうのです。あの日あのとときに起こつた悲劇をもう二度とくり返さないと誓つたあの日から七十二年も年月が流されました。あの悲劇をもう美談と葬つた原因はどこにあるのでしょうか。

先日、妹がニュースを見ながらポツリと言つた一言が印象に残りました。

「戦争つて誰が悪いの？」

偉そうに語るジャーナリストやコメンテーターもこの質問には答えられないのではないのでしょうか。見えない悪意ほど恐ろしいものはありません。日本、いえ地球はそうして多くの犠牲者を生み出してきました。大きな戦争だけでなく、私が生活する学校、地域などでもそういった悪意からはじまる悲劇があります。胸にとどめておくことのできない悪意を遠慮なく吐き出してしまえるような場所をつくるべきだと私は思います。本来家庭や学校がその役割を担うべきではないのでしょうか。

今地球という星が求めているのは「平和」です。様々なメディアやジャーナリストの声をまとめてみても結局「平和がいいね」ということになるのではないのでしょうか。実際そんなに簡単に済ませられる問題ではないかもしれないけれど「平和がいいね」という気持ちを胸の中にとどめておく

ことから私は始めて行かなければならないと思います。

しかし人が十人いれば趣味や好みがそれぞれなように平和の定義は様々です。七十二年前は満足に食することも夢を見ることもできませんでした。人々はいつかこんな苦しく辛い生活が終わることを平和としました。戦争が終わり、世界は著しく発展し、七十二年前の平和が「当たり前」に変わったら今、この星では新たな悲劇が起ころうとしています。誰が悪いなんて分かりません。そもそも本当に悪いことと正しいことの判断なんてつかないのだと思います。でもやっぱり「平和がいいね。」いつか一人一人の「平和」を当たり前に、そこから生まれた「幸せ」が「悪意」を癒やすことができるように私達は願わなくてはいけないのではないのでしょうか。

## 未来を担う私たちの主張作文〈優秀賞〉

すばらしい伝統

春日部市立豊春小学校六年

相川 七海

わたしには、今、がんばっていることがあります。それは、五年生の時、目標に決めた「ボランティア清そう」です。

このボランティア清そうを目標にした理由は、毎朝、職員室の前をもくもくとそうじしている六年生の姿があったからです。ある朝、わたしが職員室前を通った時、六年生がふいたあとのろうかがぴかぴかと輝いていることに気づきました。そして、六年生が学校のために活動している姿に心がスカッとした気持ちになりました。そこで、わたしが六年生になったら、他の学年の子にその気持ちを味わってほしいと思い、「ボランティア清そうをがんばること」を目標に決めました。

五年生が終わって、いよいよ六年生だという時、一つ上のお兄ちゃんが、

「ボランティア清そうは、この学校の伝統だから引きついでいってね。」

と言いました。その時、初めて六年生の責任を知り、わたしはますますがんばろうという思いでいっぱいになりました。

それから一か月後、わたしは六年生になり、いよいよボランティア清そうが始まりました。身支度を整えて、気合十分でボランティア清そうを行いました。最初は自分でできることのうれしさで

いっぱいになりましたが、実際にやってみると、すきまなくふくの、コツがいり、だんだん腰が痛くなったり、力を入れてふくので、うでが痛くなったりしてきました。それでもがんばってわたしが、職員室前のろうかをそうじしていると、たくさんの先生方から

「おはようございます。」

とあいさつされたり、

「いつもありがとうございます。」

と声をかけられたりします。また、ろうかを通る他の学年の子が「へこつ」と、お辞儀をしてくれることもあります。そんなときわたしは、朝から幸せな気持ちでいっぱいになります。それは、先生や他の学年の子にもスカッとした気持ち伝わっているような気がするからです。また、自分でボランテニア清そうをやってみることで新たな発見もありました。それは、「ありがとうございます」のたった一声で、がんばる力がわいてくることです。

家に帰ってお兄ちゃんにこの話をする、お兄ちゃんは自まんするかのよう、自分がしてきたボランテニア清そうの話をしました。それは、お兄ちゃんも今のわたしのように幸せな気持ちになったからだ、と気づきました。お兄ちゃんはこのすばらしい気持ちをずっと残していつてほしい、と思ったと思います。

わたしは、このお兄ちゃんの楽しそうな様子から、自分も学校の伝統を引きついでいきたいと思いました。そして、自分ががんばることで、五年生にもこのすばらしい気持ちを分かってほしいと思います。また、ボランテニア清そうをやってみて、「ありがとうございます」という言葉には、人の心を動

かす力があることに気づきました。ありがとうの他にも、「おはよう」「大丈夫」など、いつも当たり前に思っている言葉にも人を幸せにする力があります。六年生になって一か月、わたしは、ボランティア清そうだけでなく、人を幸せにする言葉を話せる人にもなっていきたいです。

プレッシャーとの戦い

春日部市立武里西小学校六年 加藤 心愛

私に通っている武里西小学校は、陸上がとても強いです。市内陸上大会では毎年のように優勝という実績を収めています。私は今年、学校の代表である六年生になりました。そして今、「十五連覇」というプレッシャーに追われています。

「今までの連覇をとぎれさせたくない。」

と思い始めたのは六年生の初めでした。五年生の時は六年生がいたので、不安の気持ちには、なりません。しかし、自分が六年生になると、「連覇」というプレッシャーが私の心に重みとなっておそいかかってきました。私は、タイムをちぢめなければ他の学校の子ども達に負けてしまう、という不安でいつものように体が動きませんでした。また、練習は四、五年生と合同でやるので、下の学年の子がふざけていたり遊んでいたりとすると、いらだちをかくせずにいました。うしろの方で遊んでいると

「ちゃんとやってよ。」

「そんなんじゃないからね。」

ととてもいやな言葉を使ってしまった。すると自分のことも下級生のこともいやになり、どんどん自分を追い込んでしまいました。



「自分では、もつとうまくなりたいのに、もつと練習したいのに何で下の学年の子はついてきてくれないの。」

と、頭をかかえる毎日でした。何もかもがうまくいかずに、いやになっていきました。でもやめたくなかったのです。

だから私は考えました。

「今までの六年はこんな時どうしていたのだろう。その六年生と今の私は一体何がちがうのだろう。」

いろいろと考えては出た答えは、「みんな楽しそうにやっていた。」です。もちろん全然プレッシャーを感じていないのではなかったと思います。でも、一人が勝ち取るものではなくみんなが力を合わせて勝利を勝ち取り、連覇をつないでくれたのだと私は考えました。そして今までの6年生達は、下の学年にも優しくし、強い言葉を発していなかったことに気づきました。それは、今後も連覇をつないでほしいという気持ちがあったからだと思います。下の学年の子にやる気を持たせないと今後の連覇をつなげられないと思ったからだと思います

陸上大会はもう目前です。今までの練習した成果を発揮し、この思いを胸に必ず優勝します。そしてみんなと力を合わせて、連覇をつなげてみせます。

## 女子野球に出会って

春日部市立宝珠花小学校六年 滝本 かのひ

女子も参加できる少年野球チームがあることをみなさんは、知っていますか。

私は今、男女混合の少年野球チーム「桜川ジャガーズ」と、女子だけのチーム「春日部さくら」の両方に所属して野球をやっています。

私の父は中学・高校・大学とずっと野球部で、母も野球部のマネージャーをしていました。小さい頃からプロ野球などの試合を観戦し、野球と関わりの深い生活を送ってきました。

しかし、『観る』が中心だった私を大きく変える日がやってきました。それは十歳の誕生日、家族が私専用にとグローブを買ってくれたのです。私はうれしくて早くキャッチボールがしたいと弟をさそいました。そしてこれを機にプレイの楽しさを感じ始めました。

五年生の五月、私は弟と一緒に桜川ジャガーズに体験入団しました。そこに女子団員が一人いました。名前はユリちゃん。一つ年下の四年生だったユリちゃんは、私よりも背が高く野球がとっても上手でした。練習中のプレイはとってもカッコイイのですが、休けい時間になると、おしゃべりが大好きなふつうの女の子でした。「私にも野球ができるかも。」私は野球を始める決心がつかしました。

入団してからは、団のみんなに迷わくをかけないように、チームが勝てるようにと、土日祝日は

休まず練習に参加しました。少しすると、桜川ジャガーズの副代表から女子野球チームに参加してみないかと言われました。『女子だけの野球チームってどんな感じなんだろう。』とわくわくしました。「春日部さくら」に参加してみると、男女混合チームと全く変わりませんでした。休けいの時だけ、みんなふつうの女の子にもどります。私は桜川ジャガーズも春日部さくらも大好きになりました。

野球を始めて半年間くらいは「自分のところに打球が飛んでこなければいいな。」と思っていました。いつもフライは落としてしまうし、ゴロもトンネルしてうまくできなかったからです。しかし守備の基本を監とくやコーチがいていねいに教えてくれました。さらに家では父がアドバイスをしてくれました。平日の放課後は母がノックしてくれ、弟と一緒に練習にはげました。おかげで今では「団の中でフライをとらせたら一番うまい。」と言ってもらえるようになりました。

今年になって、桜川ジャガーズに女子団員が新たに二人加わりました。公園の中のグラウンドで試合をすることも多いけれど、男子五人女子四人で試合に出ていると、相手が不思議そうな表情をします。春日部さくらの試合を観た通りすがりの人は口々に「女子が野球やっているんだね。」と言い、私はそうした表情や声を聞くと複雑な気持ちになります。『女子だって野球をやっている子はたくさんいるよ。』という気持ちと、『女子が野球をやることはふつうじゃないかも…』という気持ち、二つの思いがおし寄せてきてもやもやとしてしまうのです。特に私以外のジャガーズの三人は、ユニフォーム姿は学校の友達に見られたくないと言います。私は、自分が野球をやっていることは学校の友達みんなが知っているのに気になりませんが、他の子は違うんだと気づきました。「女

子が野球をやることも当たり前になってほしい。」心からそう思います。

女子でも男子と一緒に力を合わせ試合で勝つことができます。つらいこともうれしいことも、みんなが一緒だとだいじょうぶと思えるたのもしい仲間達です。桜川ジャガーズの指導者も団員も特別扱いは決してしません。男女平等です。私は、それが当たり前であることがうれしいです。女子野球チームはこの地域には少なく、試合相手はいつも同じ、中学生になると機会はさらに減ってしまいます。でも野球はすばらしいスポーツです。こんなに楽しい野球をする喜びを、男子ばかりでなく女子のみんなにも知ってもらいたい。そう願いながら私は今日も、練習にはげんでいます。

私の夢、ドッグトレーナー

春日部市立富多小学校六年 渡邊 花音

私の夢は、ドッグトレーナーになることです。ドッグトレーナーとは、ペットとして飼われている犬のしつけや訓練を行う仕事です。でも、ドックトレーナーの中には、捨て犬を盲導犬や警察犬に育てる方もいます。私は小学校四年生の時にドッグトレーナーの仕事を知り、なかでも捨て犬を救うトレーナーになりたいと思いました。

小学校四年生の時、家の前の道路で子猫が死んでいました。初めに見つけたのは私で、道路に横たわっている子猫におそろおそろ近づいてみました。全く動かない状態で、車にはねられたようでした。急いで家族に報告すると、祖父が、

「今日は日曜日だ。明日市役所に電話するから大丈夫だよ。」

と言ってくれました。でも、私は目の前で小さな命が失われたことを受け止めることができず、その子猫のことが気になって気になって頭から離れませんでした。親猫は子供がいなくなつて心配していないのかな、夜になって雨が降ってきたので寒くないかななどと、一晩中考えていました。もし、他の動物に食べられたらと思うと、さらに心配は増してきました。その時の気持ちは今でも忘れられません。翌日、学校へ行くときには子猫はもういませんでした。その頃から、私は動物の命について深く考えるようになりました。

ある日、家族でペットショップに行きました。かわいい子犬や子猫がたくさんいます。そのとき私がかわいいな、飼いたいなと思いました。でも、店内をよく見てみると人気がない犬が売れ残り、値下げされていました。新しい飼い主が現れない動物たちは、この先どうなるのだろう。私は心の中で疑問に思いました。

またある日、テレビを見てみると、捨てられた動物や売れ残った動物の殺処分に関する番組をやっています。気づくと私はその番組にくぎ付けになっていました。日本では年間、約八万三千頭の犬や猫が殺処分されているそうです。

その事実を知って私はとても驚き、悲しい気持ちになりました。興味を持った私は、自分でさらに調べてみることにしました。平成二十七年の統計では、都道府県別で一番処分数が多かったのが長崎県で埼玉県は三十四番目でした。それでも年間約九百頭もの命が処分されているそうです。処分される理由を見ると、人間に捨てられた動物が保護施設に移された後に、引き取り手がない場合、処分されているそうです。またペットショップ等で売れ残った動物たちも、最悪の場合、同じ道をたどるそうです。その事実を知ったとき、私は悲しくて言葉が出ませんでした。どうして同じ命なのに、人間の勝手で大事な命がうばわれてしまうことがあるのか。ペットショップで売られている血統書付きの犬も、保護施設にいる引き取られた犬も同じ命ではないか。いろんな思いがかけめぐりました。

失われる命を何とかしたい。そう思った私は一冊の本に出会いました。その本には保護施設に引き取られた動物たちが、ドッグトレーナーによって盲導犬や警察犬に育てられていく実話が書かれ

ていました。日本には警察犬、災害救助犬、盲導犬、聴導犬、セラピードックなど、多くの訓練犬が人のために活躍しているそうです。私はそういう犬たちに感謝の気持ちと愛情を持つとともに、自分もドッグトレーナーになって、一つでも多くの命を救いたいと強く思いました。

私は今、小学校六年生です。将来の夢はドッグトレーナーになることです。今は夢を叶えるために、自分が進む道を真剣に考えています。人間の都合で失われるかけがえのない命を救うため、私はこの夢を叶えたいと思います。そして、人と動物がみんな幸せになれる社会を一日も早く作りた  
いと思っています。

## コミュニケーションを取る楽しさ

春日部市立葛飾中学校二年 堀口 遥香

私は、友達に本音を言うことが、なかなかできません。なぜなら、その友達に遠慮してしまうからです。私の本音が、相手を傷つけてしまうかもしれないと思って、いろいろな気持ちを自分の中にしまい込み、ストレスがどんどんたまってしまうのです。

しかし、それは私だけではないようです。最近、家に引きこもって長い間外に出られない人や、いじめなどが原因で自殺してしまう人のニュースが増えてきている気がします。それらの共通点は、辛いことを一人で抱えこんでしまうことです。その原因として、自分を表現する言葉が見つけれなかったり、コミュニケーションの取り方がわからず、うまく伝えられなかったりすることがあるのではないのでしょうか。

コミュニケーションには、相手を理解したいという気持ちが根底にあるように思います。しかし、相手にどう思われるかという不安があるうちは、あたりさわりのない、上辺だけの言葉のやりとりになりがちです。時間をかけて互いを理解し、受け止めることの積み重ねで、自分と相手との間に安心感や信頼感が生まれると、コミュニケーションを取りやすくなると思います。

私は友達に自分の気持ちと言えず、悩んでいました。私はこっちの遊びがしたいけど、相手は別の遊びがしたいと言っているから言わないでおこう、本当は勉強したいけど、雰囲気壊したくな



いから言わないでおこうなど、小さなことの蓄積が、大きなストレスになっていました。ある日、勇気を出して言ってみると、あつけないほど簡単に受け入れてくれました。その時、もつと早く言っておけば良かったと思うと同時に、ちよつとした勇気を出すことで伝わることもあると実感しました。しかし、全ての人が勇気を出せるとは限りません。そのために二つのコミュニケーションの取り方を提案します。

一つ目は、笑顔であいさつをすることです。私は、生徒会であいさつ運動に参加しています。あいさつを返してもらえないときに悲しい気持ちになることもありますが、初対面の人や、話したいけれど話しかけられない人にあいさつを返してもらえると、とてもうれしくなります。笑顔で、というのも明るい気持ちになるポイントです。

二つ目は、一緒に行動することです。これは、言葉ではないコミュニケーションなので、話すことが苦手な人でもきつとできると思います。同じ部活や委員会で活動すること、それがきつかけで仲良くなるようなように、さりげなくでも一緒に行動することで伝わることは多いものです。

コミュニケーションは声をかけ、話を聞くといい、キャッチボールのような関係が必要です。自分の言いたいことを押しつけるだけでは伝えることはできないし、コミュニケーションを取るどころか相手に避けられてしまう可能性があります。対等な立場で理解しようとすることが大事です。

三年後には、東京でオリリンピックが開かれます。その時私は高校二年生。それまでに、得意な英語の勉強を頑張る、学び得たちよつとした勇気で、外国人を案内するボランティアをやりたいです。世界は今、テロなどの問題で、相手を受け入れるより自分を守るという雰囲気がありますが、それ

もうまくコミュニケーションを取れないことが原因だと思えます。しかし、そんなときだからコミュニケーションの楽しさを知る人が増えれば、テロのような悲しい事件やそれに巻き込まれてしまうことがなくなり、今までよりもつと安心できる世界が広がるのではないのでしょうか。自分の考えを伝え合うことで世の中が良い方向に変化していくと多くの人が信じられる世界がくるように、私は私にできることから始めたいです。